

# 川端康成の自然観

——『雪国』をとおして——

金 采 洙

## 序

川端康成の『竹の声桃の花』（一九七〇年二月）の冒頭に次のような文がある。

竹の声、桃の花が、自分のなかにあると思ふやうになつたのは、いつのころからであらうか。

今はもう、竹の声は聞えるだけでなく、桃の花は見えるだけではなくて、竹の声が見えたり、桃の花が聞えたりもする。

竹の声を聞きながら、そこには聞えてゐぬ松の声を聞くこともある。桃の花を見ながら、そのときは咲いてゐぬ梅の花を見ることもある。人間にはめづらしいことではないが、宮川久雄のそれは年老いてのことである。

川端がこの作品を書いたのは、彼が自殺する一年六か月前のことである。死の三、四か月前にあたる一九七二年一、二月に

は、短編『雪国抄』を書いて、遺稿として残し、半世紀以上の作品創作生活の幕を閉じる。

『竹の声桃の花』は、主人公の宮川が二年前の春、自分の家の裏山の古い松の梢にとまっている鷹を見つけて、それが何故そこに飛んできてとまっているのかを考えていたところ、いつからか自分の中に、竹の声、桃の花があるように感じ始めたという内容の掌小説である。「鷹」が主人公宮川老人にとつて「死の使い」として意識されることで、老人は自分の体の中にそのような自然物が存在しているということを意識するようになるのである。

我々は、川端の末期の作品の中の彼の分身とも言える宮川老人のそのような思念を手がかりとして、彼の文学世界を考えてみた場合、彼の文学が「竹の声」、「桃の花」、「鷹」などからなる自然物の世界、いいかえれば「自然」というものどれほど深い繋がりを持つているのかということを探察することができる。「竹の声桃の花」の主人公の思念をとおしてうかがえるように、死をひかえた川端にとつての「自然」とは、彼が精神的によりかかることのできる唯一の存在だったのでなからう

か。のみならず、彼が自殺をとおして自分の肉体をかくも瞬時に廃棄してしまうことができたのも、おそらく自分が〈自然〉によって救われ得るといふある信念のようなものが彼に意識的・無意識的に作用したからではなからうか。

彼がその文学的道程において、〈自然〉の問題を真摯に論じ始めたのは、新感覺派運動を展開していた頃からである。その後彼は、随筆「末期の眼」（一九三三年一月）の執筆を通じて、〈自然〉に対するもう一つの新しい立場をとるようになる。そして彼の〈自然〉に対する立場は『雪国』執筆をとおして晩年の『竹の声桃の花』でのような立場へと展開していったのである。

彼の〈自然〉に対する一つの確実な立場は「新感覺的表現の理論的根拠」を通して「百合の内に私がある。私の内に百合がある。この二つは結局同じである」という見方から成り立っていた。ところが、彼が「私の中に百合がある」という考え方を捨てて、「百合の中に私がある」という考え方を受け入れ、それを進展させてゆく過程で書かれた初めての作品が、すなわち『雪国』である。彼は、『雪国』の創作をきっかけとして、彼特有の創作法と文学的世界を確立し、それに基づいて自らの代表作群を次々と創り出していったのである。川端は、『千羽鶴』（一九五二年八月）を書き終え、『山の音』（初出、一九四九年九月―一九五四年四月）を発表する過程で、『文芸春秋』（一九五二年一月）に短編「自然」を発表する。この短編小説の題名「自然」は「自然に」という副詞としてつけられた言葉で、たとえば作品の中のある人物が寿命を尽くして、自然に自然の

世界に帰るといふことからとられた言葉である。この作品を通じて把握されたところによれば、この作品を書いていた当時、川端における〈自然〉は、客体として意識される人間に対して、主体的存在として意識されていたようである。彼は、自然に対するそのような次元における認識を通じて、最晩年、精神的に〈自然〉によりかかることができたし、それに自らのすべてをなげうつことができた。そうすることができたからこそ、彼は自殺を実行できたのだ。

では、川端は、『雪国』をとおして〈自然〉をどのように記述し表現しているのであろうか。または、『雪国』の執筆過程での〈自然〉に対するどのような体験を通じて、東洋人の伝統的自然観を導き出して、それを彼が自らの自然観として確立することができたのであろうか。本稿は、この問題について重点的に論議することを目的としている。

## 一 作品世界の構成と〈自然〉

### （一）作中世界の舞台と〈自然〉

作中世界は、〈場所〉、〈時〉、〈人物〉などからなる。とすれば、まず「場所」は、〈自然〉とどのように関連づけられているかという問題から考察してみることしよう。一般的に自然とは、木、石、山、雲、空、雪、鳥、昆虫などのような自然物から構成されている世界およびそれらを一貫しているある秩序体系をさす。『雪国』の場合、「長いトンネル」越しに、雪の多く降る地域、一言で言つて、「雪国」、すなわち、雪の里をさし

ている。

この作品世界の中心舞台と言える雪国地方は、まず名称そのものが物語っているとおり、十一月の下旬ごろから、その次の四月の下旬ごろまで半年以上も雪で覆われている地方であつて、雪によつて特徴づけられる場所である。雪が降つて、それが大地にうずたかく積もり、またそれがいつのまにか別れも告げず溶けてなくなる現象は、我々人間が感知しうる最も悲しくかつ最も美しい自然現象の一つであろう。そのような自然現象を鮮明に感知することのできる空間が本作品の作中世界の舞台として設定されているのである。

一方長い冬の間雪が多く降る雪国地方も、雪が溶けた春には新緑がしげり、夏には深緑となり、秋には紅葉が映える。このように作中世界は、春の新緑、夏の深緑、秋の紅葉や落ち葉、冬の雪などをとおした季節の変化が明らかな空間という側面でも、もう一つの特徴を帯びている。

本作品世界における雪国地方は、「長いトンネル」を境界として、東京地域とは対峙した空間として設定されている。「長いトンネル」の向こうの東京地域が近代西欧文明の氾濫する場所であるのに対して、雪国地方はまだそれが浸透しきつていない地域であり、日本の伝統文化が残存している地域である。雪国地方の中でも本作品世界の中心舞台として設定されている温泉村は、トンネルの開通以後、東京からの春と夏の登山客、秋の紅葉狩り客、冬のスキー客などといった具合で、多くなつたレジャー客の出入りを通して、伝統文化が退潮してゆく空間として設定されている。このように本作品世界の舞台と関連した

〈自然〉は、人間の力をとおして変化してゆく人工化された近代文明世界と対立的な位置にある自然物ないし絶え間なく変化する自然の秩序として考察される。

## (2) 時と〈自然〉

作中世界を構成する要素としての〈時〉は、作中世界の〈事件〉と深く繋がっている。その世界は、過去形で叙述されている。我々が、この作品の中心事件を視点人物島村を軸とした駒子と葉子との三角関係として把握してみた場合、いわゆる「過去完了事件」は、過去の進行事件がはじまる時点である、ある「年の暮」から七か月前であるその年の五月下旬に発端が置かれていることがわかる。

この作品の中心事件の前半部をなしている過去完了事件は、このように端を発している。東京で生れ、そこで暮らし、父母からもらつた遺産で無為徒食の生活をしている島村は、知らず知らずのうちに自分に対するまじめささえもすぐ忘れがちになり、それを回復するには山がいいと考えるようになった。それで島村はよく一人で山歩きをしていたのである。雪崩れの危険な時期が過ぎ、新緑の登山の季節にさしかかる頃、すなわち五月下旬のある日、島村は県境の山を回つて歩き、一週間後に下山する。元気が回復し、温泉村に入り、そこで駒子と出会う。

この作品の中心事件の前半部をなす過去完了事件は、島村がこのように駒子に会うことから始まる。中心事件の中、後半部をなす過去進行事件は、その過去完了事件が発端した時点から七か月ぐらい経つた十二月の末に、島村が雪国の温泉村へ駒子に

会いに行く汽車の中で、温泉村出身の葉子を見出すところから始まる。

このように中心事件の前半をなす作中の過去完了事件の発端は、新緑の季節の到来を契機として進行することとされている。島村が雪国で駒子に初めて会ったのは、春から夏へと季節が変わる五月の下旬であり、彼が雪国に彼女を二回目に会いに行った時期は、秋から冬へと変わった十二月の末ごろである。

三回目には、夏から秋にさしかかった九月の末ごろである。このようにこの作品世界に設定された「時」は、まず一次的に自然現象によって起こる季節の変化と深く関わっている。季節の変化は、自然現象によって起こる昼夜の変化を通じても起こるが、この作品の「時」はその昼夜の変化とも深く関わっている。たとえば、作者はこの作品世界の視点人物島村を通して、昼が夜へと移り変わる「夕方」や、夜が昼へと移り変わる「明け方」に起こる様々な自然現象について敏感な反応をみせることで作中世界を昼夜の変化と深く関連づけている。

昼夜の変化は、新しい季節を到来させ、またそれらの変化は新しい年を到来させ、歳月の流れと新しい時代の到来を可能とする。この作品世界に内在された「時」は、新しい時代の到来とも深く関連づけられている。作中世界の中の「長いトンネル」が開通し、東京からの登山客、紅葉狩り客、スキー客などが、季節ごとに雪国地方にくりだすようになるのは、島村が駒子に初めて会った時点から、一、二年前のことだ。このような状況を鑑みると、島村と駒子の出会いもトンネル開通と決して無関係ではないと考えられる。なぜなら、島村もトンネル開通後、

東京から雪国地方に押し寄せた登山客のうちの一人だったからだ。

島村と葉子との出会いも、結局は、新しい時代の到来とけつして無関係ではない。島村が彼女を初めて見たのは、汽車の中だ。汽車が開通していなかったら、島村が雪国地方行きの汽車に乗ったはずはなかったからである。また葉子の場合も、雪国地方を去り、東京から汽車に乗ってふたたび雪国に戻ることにしたのである。雪国地方の人たちが都市へと抜け出す一方、東京の人々が雪国地方へと押し寄せることで、縮の産地のような雪国の伝統文化が解体され、代わりに東京の都市文化が雪国地方に押し寄せることで、雪国地方にも新しい時代が到来することになるのである。

#### (二) 登場人物と「自然」

この作品の視点人物である東京出身の島村を除くすべての人物たちは、雪国で生れ育った人たちである。したがって、登場人物の基本的な構成は、東京を背景として育った島村対雪国地方を背景として育った彼以外の人々という対立を主軸として形づくられている。ここでの東京とは、人為によって作られた都市文明の端を発する空間であり、その都市文明の背後には近代西欧文明が存在する。一方東京と対立的関係に設定されている雪国については、自然現象によって支配される空間であり、その背後には日本ないし東洋の伝統文化が存在し、またその地盤には「自然」が存在するという考えが可能であろう。

島村はそのような東京という人為的な空間の中で生きていく

人間である。しかし彼は、そこでは自分の生活を円満に営んでゆくことができない。彼は日本の伝統舞踊に関心をいだき、その問題点を発見し、それを解決しようとして努力する。しかしそれが至難であることを悟ると、日本の伝統舞踊の研究をとりやめ、西洋舞踊の方に寝返ってしまう。彼の西洋舞踊研究とは、実物観賞を通じた研究ではなく、西洋の舞踊書を通じた研究である。それで彼は、自身の作業が「机上の空論」にすぎず、自分の西洋舞踊に関する文章というのは、「天国の詩」にも似ていると思うようになる。彼のそのような考えは、そういうふうにして作られたすべての人為的なものに対する不信感を助長させ、「不真面目」な存在へと自分自身を追いやる。彼はそのような状況から、もうこれ以上そうしてはられない、まず自分自身の「真面目さ」を回復しなければならぬ、そのためには「山がいい」と考え、「国境」の山々を歩き回るようになるのである。

言いかえれば、彼は自分が生きてきた東京という空間に西洋文化が入ってくることによって断絶させられた自分と事物との生命体系を回復させるためには、〈自然〉の中に身を浸らせなければならぬと思ひ、〈自然〉の中を出入りするようになったと言える。雪国を訪問した島村は、暇さえあれば、内湯に身を浸らせる。また同じく、島村は暇さえあれば雪国を訪問する。彼の雪国訪問は、〈自然〉の中へ自らの身を浸らせる行為である。彼は〈自然〉の中に自らの身を浸らせるために歩きまわる過程で、〈自然〉の中で生きていく駒子、葉子、行男などに接する。

駒子は、温泉村の出身ではない。雪国地方内の港町という地

域の出身である。島村において彼女の第一印象は、「清潔さ」だった。島村は、初めて彼女を見て、「不思議なくらい清潔であった」と思った。島村は、彼女のそのような清潔な印象によって彼女と結ばれ、「雪国」の中へと、「雪国」の〈自然〉の中へと吸い込まれてゆく。葉子は「雪国」の温泉村の出身である。島村は、汽車の中で彼女を見出した瞬間、「なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて」、声も「高い響きのまま夜の雪から木魂して来そうな」、「悲しいほど美しい声」と感じる。また島村は、彼女が東京の観光客が季節ごとに押し寄せる温泉村が形成される前にそこにあつた縮の産地における機織り女たちの後裔であると一人合点する。それで島村は彼女を通じて雪国地方の伝統文化のほうにのめり込み、その裏側に存在する「天の川」のような自然の中に吸い込まれてゆく。

行男と踊りのお師匠さんは、過去事件が進行する過程で死亡する。行男の死は、東京に出て夜学で学んでいたところ、「体の無理が重なって」かかった「腸結核」がその原因とされる。彼の母は、「港で芸者を勤め上げた後も、踊の師匠としてそこにとどまっていたがまだ五十前で中風をわずらい」、療養をかねて彼女の故郷である温泉村に戻ってきて、しばらく踊りの師匠をしていたが、結局死亡する。このようにみると、彼らの死は自然の循環的変化などによって起こる新しい時代の到来や、世代交代などのような現象と深く関係があるという印象を我々に与えてくれる。このように作中世界を構成する「時」と関連して把握される視点人物の島村をはじめとした作中人物たちは、東京という都市に根をおろした西欧文明と雪国地方のような自

然に根をはった日本の伝統文化との衝突による価値体系の動揺期に生きねばならなかった人間たちとして特徴づけることができる。

## 二 視点人物の関心と〈自然〉

### (1) 島村の雪国に対する関心

島村の関心は、雪国地方に対する関心、その人間たちに対する関心、その風物に対する関心などに大別される。まず、島村の雪国地方に対する関心についてみてみよう。この作中の中心事件は、島村の関心が自分の生活空間である東京のほうから雪国のほうへ移動することに端を発している。彼の関心が東京から雪国へと移動する主要な理由は何か。それは、雪国の自然物と直接的な接触を持ち、断絶されたと思える自分の生命体系を回復させようとする意図があったと見られる。

だとすれば、島村にとっての生命体系の断絶意識とは、どのようにして起こったものなのか。彼は、妻子のある身ではあるが、父母の遺産で無為徒食しており、西洋の舞踊に対する趣味を持つて暮している人間である。では、彼はどのようにして、そのような人間に転落したのか。作中での島村の育ちに関する叙述は、島村がどのようにして西洋舞踊に対する趣味をもつて生活するようになったかをよく物語っている。人間の関心は、自分の生命体系を創り出す原動力である。幼い時から島村の関心は、日本の伝統舞踊にあった。青少年期から島村は、感想、研究、批評のような行為の形で、日本の伝統舞踊に持続的な関

心を保っていたが、東京という都市空間の中で伝統文化を継承してゆくことがいかに難しいかを思い知らされたがゆえに、日本の伝統文化の継承作業を拒否し、西洋舞踊の輸入と紹介の作業のほうを選ぶようになる。それで彼の日本の伝統舞踊に対する関心は断絶されてしまうのである。

ここで、彼の西洋舞踊の輸入と紹介作業が、彼の生命体系を断絶させたとみるのは正しくない。問題は、彼のそのような作業が自分の生命体系を断絶させるという思いを彼自身に引き起したところにあると見るべきであろう。彼がそのように考えるのは、自分が西洋人の舞踊を直接見もせずに、書籍や写真を通じてのみ研究や批評をしているという行為が「天国の詩」を書くのと同じ管みだと感じたからだ。詩を書くということは、観察対象に対する感じや思い、考えを記録する行為である。しかし、研究論文や批評文は、そうではなく観察対象がなぜそのような状態に置かれるようになったかについての原因を究明し、その観察対象の構成要素間の有機的な関係を把握し、その研究論文や批評文を読む読者に観察対象の中に存在する、ある物理的次元の秩序を伝達することによって、研究者、研究対象、読者の間の生命体系を構築してゆく役割を果たすものである。

島村は、書籍や写真に頼った自分の西洋舞踊の研究論文や批評文が自分はもちろん、読者たちにも、これといった真理をなから伝達していかないということに思い至り、自分のそのような行為が自分を救うことのできるいかなる生命体系も作つてくれないという考えにたどり着いたのである。

ところで、自分の生命体系の断絶意識にとりつかれて、生の

虚無意識に陥っている彼が、自分に対する「真面目さ」を回復するのに、なぜ山がいいと考えたのだろうか。彼が自分に対する「真面目さ」を失っていると思うのは、生活とか、自分の生命体系を断絶させることを続けているからだ。とすれば、我々は、彼が西洋舞踊の研究のほうに鞍替えする以前には、真面目さを持っていたと想像してみるができる。それなら、日本の伝統舞踊の研究と彼の雪国に対する関心や雪国の山々を訪れる行為とはどのように関連づけられるのか。島村が歌舞伎のような日本の伝統舞踊に接したのは、彼が下町で少年期を送っていた時からであった。彼にとつての少年期とは、東京が当時よりも近代化されていなかった時であった。また、彼が少年期をすごした地域はそこが下町という点からいって、どちらかといえば、東京の周辺地域であり、東京とはいっても自然に根差した農村文化とか、またそれに根差した日本の前近代的文化が残っている地域だと言える。その意味で彼にとつて日本の伝統舞踊研究と雪国行きは、「自然」という面で一貫していると考えられる。したがって、彼の雪国に対する関心は、西欧文明の到来によつて断絶された自己の生命体の回復という意味を持つものと言える。

## (2) 島村の雪国地方の人々に対する関心

島村の雪国に対する関心は、その地方の山々に対する関心から具体化されてきて、その地方の人々に対する関心へと展開してゆく。また人々に対する彼の関心は、駒子に対する関心から出発して、葉子と行男に対する関心へと展開してゆく。島村の

雪国の山々に対する関心が雪国の人々に対するそれへと転換したのは、彼の駒子に対する関心をきっかけとしている。島村が駒子に対して一方ならぬ関心を持つようになったのは、彼女が島村に不思議なほど清潔に見えたからだ。では、なぜ彼女は彼の眼にそのように映ったのか。島村が疑ったように、「山々の初夏を見て来た自分の眼のせいかな」もしれない。でなければ、彼女自身が非常に清潔だったからかもしれない。人々には彼女がそう見えないのに、当時の島村にだけそう見えたのか、あるいは彼女は彼女が他の人々にも実際そう見えたのか、いずれにせよ、彼女が彼の眼にそう映ったことには、雪国の自然が深く関連している。その理由が前者ならば、雪国の新緑が彼にそう見させたためであり、後者の理由であるならば、雪国の自然物が彼女の心身をそのように育んだからであろう。

駒子は、雪国地方にある港町近辺で生れた。彼女は港町に出てきて、その舞踊の先生の門下に入って、しばらく芸者としての授業を受けた後、十六歳で東京に出て、料亭などを転々しながら一年半ほどの東京生活を体験する。そして十七歳でまた雪国に帰ってくる。雪国の港町にしばらく留まり、汽車開通の直前、舞踊の師匠について温泉村に来たのである。こうしてみると、駒子の東京生活はわずか一年半程度の期間だった。ということは、逆に言うと、駒子は一年半程度の期間を除いた十九年間の人生を雪国で送ったことになる。雪国の人々は、「雪のなかで糸をつくり、雪のなかで織り、雪の水に洗い、雪の上に晒す」。駒子自身がそのような生業にいた者ではないが、彼女は雪国で暮してきた人間である以上、雪の中で生れ、雪の中

で育ち、雪解け水で身も心も洗いながら、雪の上で生活した人間である。だからこそ東京で生活している島村の眼には駒子が清潔な女性に映ったのであろう。つまり、島村は雪国の代表的な自然物である「雪」によつて磨き上げられた駒子の「清潔な」心身に魅了され、彼女に関心を持つようになったと言える。

しかし島村は、駒子に会いに行く途中で葉子を発見し、それから彼の関心は、駒子から葉子へと移動する。その理由は何だったのだろうか。島村は、葉子を発見した瞬間「なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて」と語っている。だとすると、彼女のどこが彼をしてかくも感動させたのか。まず彼女を駒子と比較してみよう。雪国地方に汽車が開通する前の雪国地方への近代文物の流入は、港町を通じてなされた。港町へと近代の文物が流入するや、温泉村を近くの縮産地出身の機織り娘たちが行男の母のように港町に出て行ったのである。港町の近郷出身の駒子も、そのような時代的雰囲気に乗じて、港町に出て引退した芸者出身の舞踊のお師匠さんのもとに入り、しばらく芸者の修行を受けた。葉子の場合には温泉村で生れて、そこでずっと成長したあと、東京に出て、病院でしばらく看護補助員の生活をしてきた。駒子よりは、歳が一つ二つ下という設定だ。彼女が東京に出たのは、汽車開通以後のことと思われ、そのように推測してみると、彼女の東京生活は長くて一、二年程度ではないかと思われる。

駒子の出身地は、港町の近くだったのに対して、葉子の出身地は温泉村で、以前は近くが縮の産地であったと推定される。だから葉子は、以前の縮産地の機織り女たちが機を織りながら

唄っていた歌を知っている。島村が駒子に会いに行く途中で、葉子を発見した瞬間、彼女が駒子よりもっと胸の奥深くに入り込んで来たのは、島村が追い求めようとするものが駒子よりは葉子のほうに多く内在されているからだとみるべきであろう。つまり、駒子は東京に出る前にしばらく港町で生活した経験があり、雪国に汽車が開通する前の近代文物に染まっている存在であつたということだ。島村の葉子に対する関心は、駒子に対する関心と関連づけて考えてみると、精神的な次元のものと思われる。島村の駒子に対する関心は、あくまでも彼女の身体から感じられる清潔感であつた。しかし、彼女の心は近代資本主義の文物にさらされ汚染されていた。しかし、葉子の場合にはそうではない。彼女の身も心も、いまだ都市文明に染まっていなかった。そのような理由によつて島村は、駒子よりは葉子に対してより強い関心を持つようになったものと理解できる。

### (3) 島村の雪国地方の風物に対する関心

島村の雪国の風物に対する関心は、その自然現象と人々の生の姿に対する関心の二つの問題に集約できる。島村は、二回目に駒子に会いに行く汽車の中で車窓をとおしてその地の人々の分厚い服装やら、越冬用に準備された除雪車などを見かける。また、彼は、車窓に映った夕焼けなどにも関心を持つ。島村は雪国地方のそのような風物に対する絶え間ない関心を通じて、「雪国の自然が人々の生活を支配する」というような考えに耽りながら、人間と自然の関係を理解しようとし、また、そのような理解をとおして結局人間というのはどのような存在な



のかを理解しようとする。島村は車窓をとおして、雪を踏んで来る男が「襟巻きで鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れている」のをみて、「もうそんな寒さか」と車窓の外の世界にいつそう関心を寄せる。この男の場合のように、島村は人々の容貌や行動や考えを彼らが置かれている環境と関連づけて考える。それは人間が置かれている環境が変われば、その人間の容貌や行動や考えも変わるという考えを島村が持っていることを意味する。

また、彼は車窓に映える夕焼けの流れの中に浮かんでいる私たちの姿を見出し、それを通して人生を理解しようとする。彼は雪国に生きている駒子の生や彼女の生のような芸者たちの生活を理解しようと努める上においてもそのような立場をとる。彼は、駒子の生を繭の生に對比して理解しようとした。卵、さなぎ、成虫、繭というふうに変態してゆく繭の生は季節の変化にしたがっている。この場合、季節の変化が繭の存在形態を変形させてゆく。この繭の生も芸者駒子の生も同じである。雪国に季節ごとに訪れる春の新緑、夏の緑葉、秋の紅葉、冬の雪が、雪国の温泉村に春、夏の登山客、秋の紅葉狩り客、冬のスキー客を呼び寄せる。その上で、駒子のような温泉村の芸者たちは彼らを迎えることで、自分たちの生を実現してゆく。

雪国に汽車が開通される前は、温泉村は主に農民たちが皮膚病などにかかったときに、温泉の湯につかって病気を治す湯治場であった。この温泉村には近辺の縮産地に通じる「古い道」がある。行男の母の踊りの師匠や葉子は、この温泉村出身である。彼らの母や祖母たちは、この温泉村の近辺の縮産地の機織

り女たちであったと思われる。島村は、二回目の雪国訪問から東京に帰ってくる時、温泉村近辺の縮産地を訪ねる前に、機織り女たちとしての葉子の母や踊りの師匠の母、彼らの祖母たちの生に思いを巡らしてみる。

初雪で世界が真っ白に覆われれば、機織りが始まる。縮産地の女たちは、長い冬中雪に閉じ込められて機を織るのである。そうして、雪解けの春が来れば、縮の初市がたつ。雪の中であちこちの村から男女が集まって雪の中で織られた物が市場中に広げられるのだ。島村は、縮産地の村の人々のこのような生を通じて自然と人間との関係を理解しようとしている。彼は、「織り始めてから織り終わるまで、すべては雪のなかであった。雪ありて縮あり、雪は縮の親というべしと、昔の人も本に書いている」と語っている。この縮産地の人々は、雪を通じて生きていると言ってもよい。雪があるが故に、彼らの生活も存在し、雪の存在形態の変化にともなう彼らの生活の存在形態も変化していくというふうには、島村は理解しようとする。したがって彼は、縮産地の人々にとつての雪とは、彼らの存在の土台となり、またそのような雪の存在形態を支配している自然こそ、彼らにとつては絶対的な存在であると理解するようになる。

では、雪国の世界をなす雪や新緑、機織り女たち、それらと彼との出会いと別れなどを支配しているものは何か。島村は、縮産地を見て帰ってくる道すがら、「天の河」を見つける。彼は、その天の河に自分といっしょにいる駒子の顔が映っているようにも感じているかと思うと、天の河が自身の置かれている「大地を抱こうとしておりて来る」ように感じる。また、彼は

「天の河へ掬いあげられていくように」感じもする。しまいに、天の河が「さあと音をたてて」島村の中に流れ落ちるようにも感じる。島村の「天の河」に対するこのような意識は、自身の置かれている現実が雪国の世界ではなく、上から雪国を包み込んでいくかのような天の河がある〈天〉という意識に起因しているものと考察できる。要するに、島村は、雪国の自然を通じて自分と同じ人間の存在を把握しようとしたのだ。その時までの見方を揚棄し、天の河のある〈天〉をとおして人間の存在を理解してみることによって、自分の存在を受け入れようとしたのである。

### 三 事件と〈自然〉

#### (一) 進行事件の発端と〈自然〉

この作品の中心事件は、島村と駒子の愛の物語として把握することができる。このような中心事件の一部をなす進行事件は、島村・駒子・葉子の三角関係として考察できる。この作品における事件の発端は、駒子に会いに行く島村が雪国地方に差し掛った汽車の中で自分の横の窓を開けて駅長と話している葉子に関心を持つようになることから始まる。換言すれば、この進行事件は、葉子が島村と駒子との間に介入してくることに端を発しているのである。では、どのようにして葉子は彼ら二人の間に介入してくるのであろうか。

彼女が島村の横の窓を開けて駅長と話す前に、島村の汽車は長いトンネルを抜けて、雪国地方に入ってくる。島村は、雪国

地方の雪景色に接し、ここで暮している人々とは、いったいどんな人々であろうかと考えるようになる。その時汽車が止まり、またその男女が島村の窓の下のほうに歩いてきて、汽車の中からは汽車に乗り込んだ時から島村が関心を抱いていた娘が自分の前に来て窓を開け、窓の外の男と話をしている。彼らの話の内容が島村に聞こえてくることで、島村は自然にその娘にいつそう興味を覚えるようになる。このように島村が葉子に関心を持ったのは、まず彼が雪国の世界に入り込んでから、雪に覆われた世界に関心を持つ過程で雪国の世界に向けていつそう心が開けたことに起因する。

彼の視野に入ってきた雪国の世界とは、どんな世界か。それは雪で覆われている純粋な自然物の世界である。雪とは、東京出身の島村には清潔な存在であり、また消えやすいものとして認識される存在である。初雪が降るのを見ると、心の扉が開く。その開かれた心でもって我々はいつそう深く世界を受け入れる。受け入れられないものが受け入れられる場合もある。それは雪が穢れた世界を覆い尽くしたからでもあり、また我々の穢れた現実を覆い尽くした雪がすぐに消滅してしまうという意識が作用してのことでもあろう。

次に、東京出身の島村にとって自然物の世界とはどのような世界なのか。東京の都市空間がコンクリート、鉄、石などから造られた建物や道路などに埋め尽くされて、四六時中そして年中いつも同じ形をしている世界なら、雪、木、水、雲などからなる世界は、春夏秋冬つねに移り変わっている無常の世界として認識できる。このような世界に入り込んだ人々の心には、も

はやいかなるものに対する執着心も存在できないかもしれない。可能な限り心を虚しくして、その虚ろな心の中で、世界の中におけるあれやこれやを受け入れるようになるのである。当時島村における葉子は、彼の心がそのような状態に置かれたとき、彼に入り込んだ存在だった。島村は、走る汽車の車窓に映った夕焼け、その上に映った葉子の姿などに触れつつ、自分を非現実的な世界へといっそう駆り立て、葉子が自らの中に入り込めるように自身の心を開き、島村と葉子との関係が内的に形づくられてくるのである。島村と葉子との内的関係は、その後島村が駅前で会った旅館の客引き支配人から、葉子の同行者だった男が駒子の踊りの師匠の息子であるという話を聞いてから、いっそう深まる。

## (2) 進行事件の発展と〈自然〉

進行事件の発展は、島村が二回目に雪国を訪れ、駒子と再会したその次の日の午後、葉子がいると思つて彼が駒子の家に向かい散策に出かけることから起こる。島村はその日の午後、散策の道すがら駒子に出会い、そしてその前日の汽車の中での葉子と邂逅したこと、駅前の客引きから聞いた話などを駒子に伝えるが、そこから島村は葉子をめぐつて駒子と衝突する。その衝突をきっかけとして、島村は自分と彼女らとの関係に対していっそう深い関心を持つようになり、それによつて進行事件は新しい段階へと発展してゆく。

この段階での島村における雪国の世界は、彼が現実として受け入れた世界である。彼は雪国の世界へと完全に入り込み、そ

こで駒子、葉子とともに生活をするようになる。彼は彼女らと生活しつつ、雪国で生き残つてゆく人間たちの生活相を目の当たりにする。そのような過程で彼は、駒子と葉子の世界へと吸い込まれ、肉体的側面では駒子と、精神的側面では葉子と関係を持つ。そもそも雪国という世界の中で繰り広げられていた駒子と葉子の世界とは、行男を中心とする駒子と葉子との三角関係の世界だった。ところが島村が雪国の世界に入り、彼らの世界に関心を抱いてゆく過程で、以前行男を中心として形成されていた三角関係は、行男の死とともに崩壊し、それを契機として島村を中心として再編された新たな三角関係がいっそう加速してゆくようになる。その後、島村を中心とした三角関係は、島村が三回目に雪国を訪問し、その地方の自然物の変化を体験してゆく過程でより新しい形態へと発展してゆく。

島村が三回目雪国を訪れたのは、夏が秋へと移り変わる時期と言える九月末ごろで、蛾のような虫たちが命はたて死んでゆく季節である。彼はそのような虫たちの無数の死を目撃する。彼はそれと共に、前よりもいっそう深く自身の現実世界に入り込んでくる彼女らの姿も目撃する。三回目にそこを訪れる日の夜、島村は客引きに余念のない駒子の姿を見かける。彼はその次の日、村に散策に出かけ、畑で土にまみれて働く葉子の姿に遭遇する。島村は、自分にそのような世俗化した姿を見せる一方、五年間も交際をしてきた男がいると告げる駒子を、やがて自分の性的な慰め物のように接するようになってゆく。島村は、雪国の山々が紅葉で紅く染まりゆき、杉林に秋のどんぼの群れが流れ、晩秋の時雨が通りすぎるなど、深まる秋の情景に

接してゆく。島村はそれに接しつつ、わざと駒子を行男の婚約者に陥れることで、彼女との心的葛藤を作りだす。島村はそのような状況で、行男と踊りの師匠の墓の前で葉子に会うこととなり、そこで彼らの墓にはじめてやってきた駒子が葉子から許しを得て、踊りの師匠にのみ札をするのを島村は目撃する。彼女らは畦道を通って村に出て、葉子の住んでいる家の見える所で葉子と別れる。こうして島村を中心とした三角関係は、転換点を持たざるを得ない状況にたちいたることとなるのである。

### (3) 進行事件の転換点と〈自然〉

この三角関係を主軸として進行してゆく事件は、島村と葉子との対面によって、転換を迎えることになる。転換は、次のような過程を通して起こる。雪国の山々が紅葉にすっかり彩られた頃、東京からの紅葉狩り客たちが雪国に押し寄せる。それによって、雪国地方の温泉村の旅館が混雑するようになる。そこで、島村が逗留していた旅館も人手が足りなくなり、葉子を臨時雇いとして使うことになる。

初雪が降る前の日の夜、島村は自分の宿で葉子と言葉をかむす。それを契機に島村の関心は、葉子から村の女たちと彼女らの村である縮へと移ってゆく。その転換過程をみると、こうである。島村は葉子に会って、葉子から自分を東京に連れて行ってほしいという提案を受ける。島村はそうしたいにもかかわらず、駒子への気づかいから、葉子に駒子と相談してみることと間接的に提案する。しかし、葉子は駒子が自分を精神異常者とみなしているので、いやだという立場を明らかにし、駒子とせ

いぜいうまくやればいいという言葉を残してその場を去ってしまう。島村はその日の夜遅く、自分を訪ねて来た駒子に「きみはいい子だね」という言葉をなげかけてみる。つまり、彼はお前はいい子だから、もし私が葉子を連れて東京に逃げてしまっても許してくれるだろうねという意味で、駒子にこの言葉を投げかけたのであった。しかし島村は、駒子が自分の言葉の深意を察知し強く反発するのを見、結局葉子をあきらめる。その翌日の朝、島村は紅葉狩り客の歌声に目を醒ます。彼は駒子が開け放った障子窓から、初雪が降っている光景を眺める。島村は、駒子から「もう紅葉もおしまいね」という言葉を聞く。彼は、そのような情景を眺めつつ、雪の中で冬の間ずっと機を織る村の女たちのほうへと関心を向ける。

このようにこの作品の進行事件は、紅葉の季節が終わり、雪の季節が始まる時点を契機として彼らの三角関係が解体されることで転換される。このようにみた場合、進行事件の転換点は秋から冬への季節の推移と深く結び付いていることがわかる。では、進行事件は、そのような転換点をきっかけとして、どのように転換されていくのであろうか。島村は、雪の中で冬じゅう機を織る村の娘たちを思いつつ、自分を訪ねてきた駒子を見て、近くの縮の産地を訪問する。彼らの三角関係は、島村が葉子の火災現場での自殺の試みを目撃することを契機として完全に崩れさる。島村は、葉子のそのような行為を目的当たりにして、「さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるように」感じる。

彼らの三角関係は、このような過程で結末に到る。作品の最

後の部分での「天の河」とは、彼らにとつて、どのような意味をもつのだろうか。「天の河」とは、それを眺めている者には、牽牛と織り姫の伝説を連想させ、長い別れと短い逢瀬を想起させる。島村が作品の最後の部分で天の河がさあとという音を立てて自分の中に流れ落ちるように感じたというのは、まず彼が彼女らとの別離を心の中で受け止めたということを意味し、次には牽牛の現実を通して自身の現実を把握したということである。言い換えると、島村は牽牛の現実世界であった天の河の世界を通じて自身の現実世界を認識することで、別離が存在する自身の現実世界をより根源的に認識してみようとしているのである。彼は自身の現実世界をそのように認識することで、別離の雪国を脱出してみようとしたと言えるであろう。

以上のようにこの作品の進行事件は、発端、発展、転換、結末といった段階を通して進行していくのだが、その新しい段階への転換のきっかけは、以上のような雪国の自然物の変化と深く結び付いている。そのような意味で、この作品の事件の進行は、自然の変化を基礎として成り立っていると見えよう。

## 結 び

川端が「雪国」執筆に着手して、それを現在我々が読んでいる完結版にたどり着くまでには、一九三五年（三六歳）から一九四八年までの一三年という決して短くない時間が費やされた。この作品は、作者の分身と言える作中世界の視点人物島村が、西欧の近代的な文物の氾濫の地である東京から抜け出し、

日本の伝統的な文物の残っている雪国という空間に足を踏み入れることから始まり、彼がその空間を去り、また東京という自分の現実世界に戻ることを決心するところで終わっている。

島村は、変わりゆく自然物からなる雪国という空間の中に入って、その自然と風物と人間を経験し、多くのことを考え感じ、そして悟るようになる。これは、作者川端自身が実際にこの頃作品の背景の地である越後地方に出入りしながら『雪国』を執筆していった過程で、何を考え、何を感じ、そして何を悟ったか、またどんな問題を整理したのか、ということをよく示してくれる。島村はその体験を通して、人間にとつて自然というものは、その中で生存してゆくすべての人間の生を支配する存在であるという認識に到達している。それは川端が『雪国』執筆をとおして自然が主体であり、これに対して人間は客体にすぎないという観念を確立させたという意味でもある。つまり、川端は『雪国』執筆をきっかけとして、近代西欧文明を体験してきた過程で受容した思想、〈人間が主体で自然が客体〉という意識を捨てて、近代西欧文明を体験する前に日本人が持つていた〈自然が主体で人間が客体〉という意識を再確立させたということである。

川端は、『雪国』執筆をきっかけとして、そのような立場に立つようになり、彼の代表作として取り上げられている『千羽鶴』（一九五二年）、『山の音』（一九五四年）、『眠れる美女』（一九六一年）、『古都』（一九六二年）などを続けて創作した。川端は、『雪国』を通じて確立させた自身の意識の外部に存在する自然を中心軸にすえ、自分と自分の置かれている世界を認識

しようとする態度をとり、このような作品を創作していった。彼は、このような過程で自身の外部に存在する自然を拡大させてゆくことで、結局晩年には、「竹の声桃の花が自分の中にある」と考えるようになり、自殺をとおして自分自身の霊と肉をまるごと擲つことすら可能となるまでに、自然を主体化させていったと言える。

このようにみた場合、川端は『雪国』を通して確立された自然観に基づいて、それ以後の他の作品群を創作したことがわかる。具体的にいえば、『雪国』で用いた、視点人物に自然を体験させるという方法によって、人間の意識を客体化させ、自然を主体化させていくという立場を堅持し、その作品世界を創り出していったと考えられる。そのような意味で、この作品の冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という文章は、作家川端にとつては一つの象徴的意味を帯びているとみるべきである。つまり、彼にとつてそれは、客体的な存在である人間が主体的な存在である自然の世界に入ってゆくという意味であると理解される。さらに、『雪国』の縮小版といえる彼の最後の作品『雪国抄』も、そんな側面から読める作品であり、川端としては、その執筆を通して自身の自然への回帰という意味を付与せんとした作品であったと解釈できよう。

### 【注】

(1) 『文芸時代』(一九二四、一〇—一九二七、五)の第四号(一九二五年一月)の「新進作家の新傾向解説」を参考。

(2) 川端は、その随筆の中で、「末期の眼をとおして見た時のみ自然は

美しいと語った芥川の言葉を芸術の極意」と言い表している。この場合における「自然」とは、自分の意識の対象としての自然で自分の外部に存在する自然である。言い換えると、外部で自分を取り巻いている自然であり、人間における人間自身の主体として受け入れられるところの東洋的な自然を意味する。川端はそのような次元での「自然」に対する認識方法を受け入れ、そうすることによって自分の創作態度を変貌させる。

(3) 金采洙『グローバル時代の日本文学、どう研究すべきか』(韓国語、宝庫社、二〇〇〇年)、二二七—二二八頁。

(4) 羽鳥徹哉『雪国』における自然(長谷川昇・鶴田欣也編『雪国』の分析研究)、教育出版センター、一九八五年、八九頁。

(キム チェス 高麗大学 教授)